

「アスリート」はいつからどのように使われ始めたのか

スポーツ社会学ゼミナール 1215073 小安 慎太郎

1. 研究動機・研究目的

現在、「アスリート」という用語そのものに着目した研究はほとんど見られず、この語がいつからどのような意味で使用されているのかは明らかにされているとは言い難い。そこで現代日本のスポーツ界に広く使用される「アスリート」という用語が、いつからどのような意味で使用されているのかを調査することは、現代日本のスポーツ観を知る手がかりになると思う。また、このことを考えることは、現代日本の社会の中で、スポーツをする人間がどのように捉えられているかを考えることでもある。もし、スポーツをする人を指示する言葉が、「スポーツ選手」あるいは「スポーツマン」などから「アスリート」に変わったのであれば、そこには日本社会の変化が見られるかもしれないし、スポーツ自体も変化しているかもしれない。こうした観点から、「アスリート」の語の使用の変化について考察することを目的とした。

2. 研究方法

本研究では、文芸春秋が発行している総合スポーツ雑誌『Sports Graphic Number (スポーツ グラフィック ナンバー)』および Number の公式サイトである『Number web』、雑誌記事検索サイト『ざっさくプラス』を主に使用した調査を行う。これらの媒体を選択した理由としては、日本で創刊されているスポーツ雑誌で『Sports Graphic Number (スポーツ グラフィック ナンバー)』は『週刊ベースボール』や『サッカーマガジン』といったような専門誌と異なり、様々なスポーツを総合的に扱う総合スポーツ雑誌であること。そのため、多くの競技において出現が予想される「アスリート」という語を調査するうえで適していると判断した。また、日本の総合スポーツ雑誌には『Sportiva』(2002～2010年刊行)、や『広島アスリートマガジン』(1993年～現在まで刊行)といったものもあるが、『Sports Graphic Number (スポーツ グラフィック ナンバー)』は刊行期間が1980年4月から、ほとんど隔週発行されており、それらと比較しデータ数が多く調査に都合が良い。また、取り上げる競技やチームの偏りも少ないことが本調査に適していると判断したため選択した。この『Sports Graphic Number (スポーツ グラフィック ナンバー)』は対象期間すべての表紙および目次をコピーし、「アスリート」の出現を目視で確認し抽出するという研究方法を用いた。

『Number Web』は本誌とは異なるオリジナルのスポーツコラムを配信しているが、『Sports Graphic Number (スポーツ グラフィック ナンバー)』の公式サイトであるため、上述した理由とともに、調査の利便性も高いことからあわせて使用した。この媒体の使用方法としては、検索ワードを入力すると、対象の語を含むコラムが抽出され表示されるSEARCH機能で「アスリート」を検索にかけ、量的な動向を観察した。

『ざっさくプラス』は日本(旧植民地なども対象)で発行された日本語の雑誌記事が検索できる。期間は明治初期から現在まで、対象雑誌は総合雑誌など全国各地から地方で発行され

た雑誌も対象としており、膨大なデータベースである。これを用いて 1990 年～2000 年の日本語の雑誌記事すべてを対象とした「アスリート」を含む記事のタイトルを抽出した。

3. 主な結果と考察

右図のように、1990 年代「アスリート」出現頻度の調査によっては先行研究を行った石井と同様の傾向を示し、大きなスポーツイベント開催時期に使用数の一時的増加などはみられたが、全体的に増加傾向にあった。

また、主に「ざっさくプラス」の記事を質的、量的に調査し、下記のような「アスリート」の使用傾向を観察できた。

4. 結論

「アスリート」は日本では一般的に 1990 年代に使用され始めた。1990 年からの記事数の推移をみると、大きなスポーツイベント開催時期に使用数の一時的増加などはみられたが、全体的に増加傾向にある。なお 2000 年代に入っても現在まで、変わらず増加傾向にある。

また、「アスリート」の使用法に関しては、1990 年前期は『レース系競技選手』に対する主な使用、中期にはスポーツの商業化に関する記事を中心とした『プロアマ』の文脈での使用の増加、加えて『カテゴライズされた中の優れた競技選手』への使用がみられた。さらに、この時期にはすでに「アスリート」がより広義の意味で使用され始めた。そして、後期には「アスリート」の使用に広がりが見え始めた中期から、その対象や意味にさらなる使用の広がりがみられた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

私は、卒業論文のテーマ決めに長く時間を費やしてしまい、テーマ決定は卒業論文締め切り間際だった。目標字数とされる 20000 字を目指してとりかかったものの、残り時間は短く、目標字数に到達しないまま提出することになってしまった。卒業論文はレポート課題等とは異なり、一朝一夕でできるものではなかった。早い時期から興味のあるテーマを探し、コツコツと計画的に物事を進めていくことの大切さを実感した。また、本文に取りかかってから目指すゴールに向け、順を追って理論的に説明しなければならない卒業論文の難しさをも実感することになった。このように苦難、後悔を実感した卒業論文であったが、同時に得られたものも多かった。卒業後も、この卒業論文で得られた経験、知識を活かしていきたい。

最後に、この卒業論文は、渡先生、ゼミ員二人の協力なしには完成しませんでした。協力してくれてありがとうございました。

表. 雑誌、読売新聞、朝日新聞の1990年代各年の「アスリート」出現頻度（石井 2016 および筆者の調査による）

年代	雑誌	読売	朝日
1990	15	2	11
1991	20	19	44
1992	38(10)	15	6
1993	11	20	8
1994	14	22	7
1995	11	15	13
1996	45	31	19
1997	69(25)	18	43
1998	32	34	53
1999	103	74	68
2000	230	145	214